

ウギヤルの恩返し

漁業に挑戦するギヤルモット。「人と人とのつながり」の大切さを教えてくれた(ラ)さん(26)は30日、釜石に恩返ししたい」と釜石市を訪れ、市を通じて漁業の復興を願う。ウギヤルや水産関係者(小川原組合長)に小型など約30団体が参加している「漁船(0・7)」1隻を贈る一東北の水産復興を考え



釜石 漁協に船1隻贈る

釜石市を訪れた「震災後の釜石を見た時は涙が止まらなかった。船は漁業者にとって大切な物。これからの支援していきたい」と誓っていた。Liさんは「震災後の釜石を見た時は涙が止まらなかった。船は漁業者にとって大切な物。これからの支援していきたい」と誓っていた。Liさんは「震災後の釜石を見た時は涙が止まらなかった。船は漁業者にとって大切な物。これからの支援していきたい」と誓っていた。

被災地から

生活再建へ相談室

宮古・きょう開所

被災者の生活再建を手助ける民間団体「くらしの相談室」が31日、宮古市保久田に開所する。消費生活相談などの専門家に無料で相談し、必要に応じてきめ細かく継続支援する。代表理事「波岡美紀」の拠点「くらしの相談室」が31日、宮古市保久田に開所する。



制度活用策きめ細かく

相談室によると、生活に困窮している人の問題は、住宅や車が流されたのにローンが残る、職場もなくなったなど複合的な場合が多いという。必要な支援制度の活用や手続きなどを相談者ごとに方向付けしながら、励まし支える仕組み。波岡代表理事は「一人一人の暮らしを守ることは、それぞれの命を守る」と語り、心を引き締め「相談室の開設は火曜から土曜の午前10時から午後3時まで。問い合わせ、電話相談は0193・64・2400へ。」

東京都在住でルーマニア出身のバイオリニスト、ポール・フローレアさん(49)は30日、山田町船越の陸中海岸青少年の家で授業を受けている大船渡市の大船渡小(小野寺美恵子校長、児童206人)の5、6年生66人に演奏を披露し、児童を元気づけた。

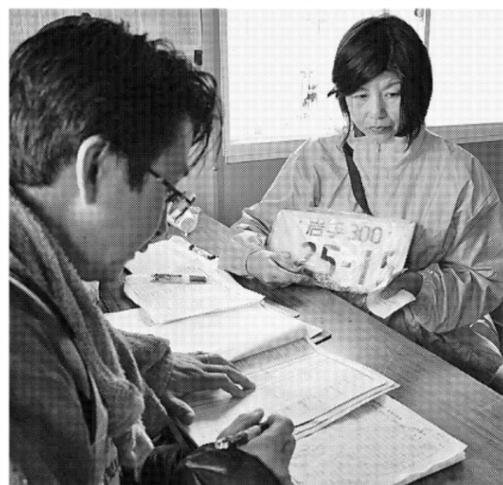


リズム軽快 東欧の風

山田で授業の大船渡小

バイオリニストが訪問

ポール・フローレアさん(左)の軽快なリズムのバイオリン演奏に笑顔を見せる大船渡小児童＝山田町



被災車両のナンバープレートを確認する担当者

被災車両引き渡し開始

大船渡市が8日まで

大船渡市は30日、被災車両の持ち主への引き渡しを開始した。市が約12日まで集めた車両は約3千台。引き渡しと同時に廃車手続きも行い、迅速な撤去を進める。引き渡しは、2500台以上が保管されている同市赤崎町の永浜・山口地区港湾埋め立て地でスタートした。この日は約50人が訪れた。敷地内の仮設事務所での職員などがナンバープレートや車体番号から所有者を確認。車両の処理を希望する人は申請書類に記入した。

同日盛町の自営業水野いり子さん(58)は会社の車6台の処理手続きを済ませた。「処分が気になってはいたが、これでまた一歩前に進める」とほっとした様子だった。手続きは同埋め立て地のほか、同市三陸町越喜来地区でも実施し、所有者の住所によって日程を設定している。

6月8日までで、受付時間は午前9時11時半、午後1時4時半。期間内に所有者が確認できない車両については市で処分する。

通り返校できています。僕たちも安全確認やあいさつなど、自分たちでできることをやっています」と約束し、千葉隊長は「みまもり隊も8年目。これからもよろしくお願ひします」とあいさつした。

対面式後は学校側との情報交換が行われ、震災後地域の交通量が増加している状況などを確認した。同隊は2006年に結成され、登下校時を中心に同校児童の見守り活動を続けている。

離れても母校の力に

大船渡市末崎町の末崎小(今野隆弘校長、児童203人)の卒業生坂下佳子さん(69)は30日、フルトペン100本を寄贈した。末崎小を1958年に卒業した関東在住者有志10人もラジカセ1台、掛け時計6個を寄贈した。

ラジカセや時計贈る

坂下さんは「みんな震災を受けて、見えない形で援助したい」と思っていた。継続的な支援ができればいい」と後輩たちを見守る。



坂下佳子さん(左)から時計やラジカセを受ける末崎小の児童ら

基金設けジャージ

陸前高田市の気仙中卒業生の会社員村上秀夫さん(38)は川崎市の30日、同市天作町の同校越恵理子校長、生徒87人を訪れ、「気仙すき」の基金に集まった募金で購入したジャージやTシャツを寄贈した。Tシャツ全校生徒分、ジャージ11人分、歯磨き用のコップ47個、1987年度卒業の村上さんは生徒に「みんなの頑張る姿が全国の陸前高田の人を喜ばせるエネルギーを送った。パレト部に所属する生徒会副会長の菅野咲さん(3年)は「中総体に向けジャージを着て練習する。応援してくれる人を喜ばせられるように頑張りたい」と感謝した。気仙すきのご基金は、震災で家族を失った村上さんら気仙中OBが募金を集めて母校の支援しようとした。海外に住むOBからも連絡があり、現在約50人が支援しているという。村上さんは「子どもたちが普通の生活に戻れるように長い支援を続けたい」と協力を呼び掛けている。



ジャージなどを寄贈した村上秀夫さん(左)と(左2人)目から芳野隼人君、菅野咲さん、越恵理子校長

郵政基金が558万円届ける

陸前高田市に日本郵政グループの社員有志による日本郵政募金会(片野健一代表)は30日、陸前高田市に全国から集めた募金558万円を寄付した。陸前高田郵便局の佐藤圭一局長ら3人が同市高田町の市役所を訪れ、戸羽太市長に目録を贈った。佐藤局長は「復興を願う全国の人の思いが被災者に伝わればうれしい」とあいさつ。戸羽市長は「市2475万円が配られる。民の元気なものになるよう有効に使いたい」と感謝した。同会は日本郵政グループの全国約2万4千店舗に募金箱を設置し、被災地に募金を配分している。1次配分では県内9市町村に計2475万円が配られる。

登下校見守り隊児童と顔合わせ

大船渡市猪川町の猪川小(鈴木一司校長、児童319人)で30日、地元住民有志で結成する「みまもり隊」(千葉永治隊長、75人)と子どもたちの対面式が行われた。隊員22人が同校を訪れ、児童と顔合わせ。児童会長の炭金諒君(6年)が「皆さんのおかげで、震災後に道路が混雑してもいつも進める」とほっとした様子だった。

登下校見守り隊児童と顔合わせ